

ある群像

2018年12月号

公益社団法人 好善社

東京都目黒区中町1-7-4

〒153-0065

電話：03-3712-3845

Fax：03-3791-1150

2018年11月25日

発行 三吉信彦

編集 長尾文雄



魂の園

塔和子

今が錯覚の春だとしたら
強制的にふるさとを追われた
苛酷なあの日は冬でした

私もいま

目の前の快さにあやされながら
冬の最中に没した
あなた達のそばにすこしずつ
少しずつ近づいています

生き抜きましよう

暖かい人々の手によって成った

魂の園で

こころおきなく

この肉体から

解放されるために

大島青松園「風の舞」 1992年建立。約1000人のボランティアの協力で造られたモニュメント。
亡くなられた入所者の納骨後の残骨が収められている。(撮影：川崎正明)

「ある群像」とは？

好善社は、一九六一年に「ライ園のキリスト者」という広報誌を発刊しました。療養所教会と入所者の信仰生活を一般社会に伝えるために、藤原偉作元理事長が発案、全国の療養所を巡って取材した記事が掲載されています。

一九七一年の二〇号から「ある群像」と改称しました。それは入所者が、ライではなく、「ハンセン病」に改称することで、過去の偏見・差別の払拭を願ったからです。

名称は変わっても、この広報誌は、ハンセン病療養所と社会の教会をつなぎ、そして当時、全国の療養所で毎夏開催していた「学生・社会人キリスト者ワークキャンプ」の参加者をつなぐことを大切にしました。「ある群像」とは、つまりこの広報誌が届けられる人びとなのです。

そして、「好善社一〇〇年の歩み」の書名を『ある群像』としたのは、好善社の誕生から今日までの歩みが、療養所と関わった人びとの「群れ」によって担われているからです。

社員・長尾文雄

入所者の 「いま」を聴く <10>

人生の終焉は、全ての人に必ず訪れます。ハンセン病を病んだが故に、重い人生被害を受けてこられた入所者が、「いま」をどのように心の内に留めておられるかを聴かせていただきました。

(インタビュー:川崎正明理事)

香川県高松港沖合の小島にある大島青松園在住の脇林清(わきばやしきよし)さんにお話しを伺いました。

—まずプロフィールを伺います。

脇林 一九三一年(昭和六)、広島県竹原市で生まれました。終戦の年にこの病気を発症、一九四八年(昭和二三)に大島青松園に入所しました。今年で八七歳、在園七〇年になります。一九六〇年に結婚、現在妻は目がほとんど見えなくなっています。

途中技術習得のため、東京のテレビ工学専門学校で二年間学んで一九六六年に卒業しました。

—大島での生活はいかがでしたか。

脇林 テレビ技術を生かして、園内だけでなく、庵治、高松、牟礼などの地域から家電修理の依頼を受けていました。高松では昼食拒否、タクシー乗車拒否などの偏見・差別を経験しましたが、あまり気にしませんでした。バスレク(ツアー)に参加して、思い出づくりの

ために写真を撮っているうちに、自分の生きた跡をカメラに残したいと思うようになりました。

—二〇一一年に、写真とエッセイをまとめた『らくがき』という本を出版されましたね。

脇林 はい、その中に私の人生観を表現しています。この島の中にある諸々生命(いのち)の姿が、レンズを通して心の中にぐんぐん入ってくるのです。写真を撮っているうちに私の見る目が変わってきました。とりわけ、雑草の中に大切なものがある。みな同じで優劣がない。そこにいのちの重たさを見ました。

—「脇林哲学」とか「脇林ワールド」等と言われていますが……。

脇林 神に造られたままに自由に生きている野の花や空の鳥の姿に、人間の



2012年8月、大島青松園棧橋にて

本當の自由と生きる意味を重ねます。

「今凜として咲く無為自然の花一輪」という写真を撮っています。自然のいのちに感動がある。レンズを通して本物と偽ものの違いを見ます。私にとつて、一番大きいのは自然との触れあいです。そこから生きる力が与えられ、作品

が生まれます。カメラを担ぐと、私は普通の人間以上に変えられ、エネルギーが湧いてきます。喜びがあるのです。望みを持って生きられるようになるのです。

—キリスト教霊交会との関係をお聞かせください。

脇林 一九六〇年に、岡山の河野進牧師から洗礼を受けました。最初の頃は情性的でしたが、教会の動きの中で導かれ、二〇〇六年より曾我野一美さんの後を受けて、東條高さん、芝清美さんと共同代表となりました。二〇一四年一月に創立一〇〇周年記念礼拝を行いました。残った会員四名の体調を考えて、翌年七月で一〇一年の霊交会の礼拝を終わりとしました。

現在は、毎月最終の日曜日に歌手の沢知恵さんのお世話で礼拝が行われています。また、毎月の木曜日に、地域の高松教会と高松常磐町キリスト教会が来て下さり、それぞれ一回センターの食堂で礼拝が行われており、出席しています。

—現在の脇林さんのお気持ちをお聞かせください。

脇林 私に与えられたいのちを最後まで守って老いるということです。周囲との関わりを持って生きること、その中で喜びや悲しみなどがあるでしょうが、それを外すことはできない。現実的に生きる場所をちゃんと捉えていないといけないと思っています。

—有り難うございました。今後のご健康をお祈りしています。

(取材 2018・10・27)

故藤原偉作元理事長

十字架の陰に隠れて

没後二〇年に際して

○二九歳での理事長就任

藤原偉作理事長（正しくは元理事長ですが、私たちの中ではいつまでも理事長なので以下「理事長」と書く）は、父鉤次郎氏死去のあとを受け、急遽理事長に就任しました。

（写真Ⅱ 鉤次郎とのツーショット）

西も東も分からぬまま、このままでは好善社はずぶれてしまうと考え、当時勤務していた現在のNTTを退職し好善社に専心、以後好善社事業にすべてを注ぎ込みました。

○療養所の先を見据えた事業を

父鉤次郎氏が地に足をつけたような患者さんを中心にした地道な事業を続けてきたのに対し、偉作さんが創出したといった事業は、戦後（一九五三年）ら



い予防法」改正以後）急速に変化していったハンセン病医療事情と療養所の生活に対応しながらの、先を見据えた事業でした。偉作さんの事業にするどさは見られませんでしたが、当時の誰もが考えつかない計画や事業を次々に打ち出していききました。あとで振り返ってみると、みな意味のある、療養所の内と外をつなぎ、ハンセン病を病んだが故に社会から見捨てられ療養所に強制隔離された人々との間に、「かけがないのない人格と人格の関係回復」を図ろうとするものでした。

○和解を求めて

その陰には偉作さんが若き日、父鉤次郎氏の仕事に触れながら、「患者さんを見捨てた」という罪意識がありました。従って、キリストの十字架によってその罪が赦されることなしにハンセン病を病んだ人々との関わりはあり得ないという強い思いをもって療養所とそこで生活する人々のもとに赴いたのです。それが、好善社全体の合言葉ともなった「十字架の陰に隠

れて療養所に赴く」でした。

「われわれが療養所に足を踏み入れるとき、そこに奉仕などという感覚はどこからも生まれてこない。ただ、十字架の陰に隠れ、和解を求めて出かけてゆくのである」（『百年の歩み』30頁）。

主の十字架による赦しの故に、和解を求め、真の人間関係を求めて、訪問を重ねる好善社の姿勢は、この藤原理事長の内心の深い思いを原点にしたものと言わなければなりません。

藤原理事長没後二〇年を経る現在ですが、私たちの、ハンセンを病んだ人々に「最後まで寄り添う」の精神はその継承とすることができよう。

（理事・棟居勇 記）

故藤原偉作元理事長略歴

- 1928年8月29日、父藤原鉤次郎、母常の4男として東京に生まれる。
- 1942年4月5日 新栄教会で貴山栄牧師より受洗。
- 1945年 立教中学校を卒業。
- 1946年 社団法人好善社に入社。
- 1950年 立教大学経済学部経済科を卒業。
- 1951年 日本電信電話公社に入社。
- 1955年 10月、福本薔薇と結婚。
- 1958年 父、藤原鉤次郎死去。
- 1958年 父鉤次郎に代わり、好善社理事長に就任。
- 1962年 日本電信電話公社を退職、好善社に専念。
- 1998年11月5日 死去。享年70歳。
- 1998年11月14日 葬儀（於・新栄教会）
- 1999年1月15日 追悼記念会（於・新栄教会）
- 2008年9月15日 没後10年記念会（於・新栄教会）
- 2018年11月17日 没後20年記念会（於・新栄教会）



第14回タイ国青少年ワークキャンプ
＜報告＞ 代表理事 三吉信彦

日程／2018年8月9日～16日

(ワークは11日～13日)

ワーク地／東北部アムナーチャルン県

カムノイ村(昨年と同じ)

参加者／日本9人、タイ53人、

オーストラリア7人

テーマ「チーム」(聖書・詩篇133編)

好善社が国内で実施してきたワークキャンプは、ワークそのものに目的があるのではない。ハンセン病の歴史と実情を知らない若い世代に、長く社会の片隅に追いやられてきた療養所と入所者の方々を訪ね、差別と偏見の実態を知らせ、それとどう向き合うかを考えさせることにある。

一方、タイ国のハンセン病コロニーで実施されているワークキャンプは、少々事情が異なる。それはやはり今なお貧しいコロニーで、敷地内の道路や家屋のコンクリート張りなどの環境整備が求められ、ワークそのものが当然

に主要目的となる。

また、タイのコロニーでは家族が一緒に住んでいる。つまりタイ側のキャンパーたちは、ハンセンという病と身近で向き合ってきたこと。また彼ら自身も元患者の祖父母や親と共に差別、偏見を受けてきたことなどが、日本のキャンパーと大きく異なる点である。これらをわきまえた上で、一四回のキャンプを重ねてきた。今年はいままで最高のキャンプであった。

何よりも総リーダーを務めてきたサクチャイとそのスタッフの成長である。最初の頃は、ただワークの成果を喜ぶだけで、特に次につなげることも考えず、キャンパー同士の継続的な交流を図ることもなかった。

さらにキャンプ後に幾つかのコロニーを訪ねた日本人チームのために、青年リーダーが率先して村の中を案内し、説明してくれた。その喜ばしく、誇らしげな顔が印象的であった。

一方、村の子どもたちはハンセン病について当然に理解しているものと私たちは思っていたが、実はむしろ身近すぎて関心を抱かないことに気づいた。そこで、キャンプ中に元患者の後遺症の悪化を防ぐ手立てを、本人も家族もわきまえて実践するよう阿部看護師が指導することとなったのである。

さらには、ここ二、三回のキャンプに、コロニー出身ではない青少年が参加して来ていることも特筆すべき点である。ハンセン病コロニーはタイ社会

最高のキャンプを体験

好善社が目指した理念を実現

好善社ではキャンプのあとに毎年リユニオンを開き、前回の反省をもとに、次回の展望を図ったり、参加者同士の間を深めることを大切にする。その好善社のリユニオンに、サクチャイたちを二〇一四年以後三度招いた結果、その有用性を理解したチャンタミット社でもリユニオンを実施し始めたのである。

今回は、特にリーダー同士の交流、また研鑽を積むことにサクチャイが意を用いて、タイ人青年リーダーたちのチーム作りが見事に成功したのである。

これもまさに好善社が目指した理念が実現したわけで、心から感動を覚えたことである。

最後に、日本のキャンパーたちも多くのことを学んだ。何よりも強制隔離の日本の療養所と、家族が共に住むタイのコロニーの違いである。

さらには近年、タイではハンセン病コロニーが保健省の管轄から外れて、普通の村に移行している。日本ではどこまでいっても「療養所」であり続ける現実、日本のキャンパーたちも深く考えさせられている。

終焉に向かう療養所

大島青松園

スタディーツアー報告

社員・渡辺圭一郎

タイ国青少年ワークキャンプの参加者とその家族（子どもを含む）一三名が、九月二三日〜二五日、大島青松園を訪れました。研修と交流の二本柱で、二泊三日のプログラム。研修では、三吉代表理事から「大島青松園の歴史・特質」、歌手沢知恵さんから「ハンセン病との関わり」、そして入所者の語り部と岡野美子園長のお話を聞き、施設の案内を受けました。

研修の後、参加者同士で分かちあいの時間を持ち、学びを深めることができました。皆が一樣に心に抱いていたのは、肌で感じる「終焉に向かう療養所」の実態ではなかったかと思えます。

今回の大島青松園スタディーツアーによって、訪問した一人ひとりが終焉に向かう療養所の実態を肌で感じました。それは時の流れの中で、療養所と共に差別の実態や問題が、忘れ去られていくという危機感でもありました。一人では無力感に打ちのめされる現実に向かいながらこそ、「私に何ができるのか」を互いに語り合えたのだと振り返って思います。好善社との繋がりで療養所の入り口に立たされ「ここからあなたはもう生きるか」を問われた私たちは、今もう一度、終わりの時を刻む療養所の前で「あなたはもう生きる



のか」を問われたのです。しっかりと何かを背負わされたような重みが、参加者一人ひとりにはあったことと思います。

（写真Ⅱ大島青松園スタディーツアー参加者）

夏休みの思い出

枚方市立開成小学校三年

渡辺佑一郎

ぼくは七月三〇日に、ぼくとお父さんと高校生の男の人と、はんせんびょうりょうよう所訪問に行きました。すごく遠かったです。そして、ながしまたい生園に行き、はんせんびょうのこをいろいろ知りました。

そこに行くときゅうに、お父さんがはんせんびょうで子どもの時にりょう

よう所に入った人の言ったことを言うてくれました。それは、「むねん」でした。ずっと、とじこめられていたからかもしれない。お父さんやお母さんが「もどってくるよ」と言ってももどってこないし、なおつてももどることはできなかったからです。そして七〇才くらいになった後にもどることはできたけど、お父さんもお母さんいなくなったと言っていました。

そして仕事もさせられたそうです。おもいにもつをのせたトロッコを七人くらいでおしていたそうです。それはくるしんでいる人をさらにくるしめていることだと思えます。

そしてさいごに、すこしおもしろくてぜんぜんちがう話になるけど、行く中に高校生の人がたまにへびやカエルなど食べることがあるそうです。ぼくはすこし引き寄せました。あんがいおいしかったそうです。これでおわります。



渡辺佑一郎君

三吉信彦代表理事談

国内療養所研修ツアーも、駿河療養所（二〇一五年）、宮古南静園（二〇一六年）について三回目です。回を追うごとに、新しい企画も加えて充実してきています。

好善社社員たちの 療養所訪問報告

「国内のハンセン病療養所を訪問することを、現在の最も大きな目標にしている好善社は、二〇一七年度は国内一三療養所を延べ約一五〇人の社員が訪問しました。今年も一月から一月まで延べ九七名が、一カ所の療養所を訪問しています（一覽表参照）。その中の三人の訪問報告の一部を紹介します。

大島青松園——乗圭子

青松園訪問は六年ぶりでした。六年を経過した園内は、以前に増してひっそりとして、朝も昼間も殆ど人に会うこともなく、盲導鈴だけが淋しく鳴り響いていました。

教会代表の脇林清さんと東條高さんの居室を訪ねました。短い時間でしたが、写真が趣味の脇林さんの撮影されたアルバムを見せて下さる笑顔に触れ

ることができました。東條さんは駿河の上野忠昭さんと親しくされており、七月に駿河に出かけられることを楽しみにお元気にされている様子に安心しました。山本千沙子さんは腰痛のため、病室生活が長いようですが相変わらずの記憶力で、様々な思い出話に花が咲きました。「教会員は少なくなっただけ皆が仲良しになったのよ」と明るく仰った言葉が印象的でした。

邑久光明園——山本公子

二年ぶりの訪問でした。光明園は、少し距離の空いた時もありましたが、途絶えることなく訪ね続けたところでした。到着すると、若い日々の思い出や、出会った姉妹（もうほとんど召された）との思い出が一気にあふれる思いがして、改めて半世紀秘の人生の傍らにあったと実感しました。

園の「しのび塚」に立ち寄りました。十数年前、たまたま教会員のAさんが召されて、火葬場に同行を求められ、お骨と一緒に数名の方と拾ったことがあります。遺体の周りに数名しか立

ち会えないような、あの粗末な火葬場で、昔は同じ病者がその作業をしたと聞きます。ハンセン病の苦難を生きて一体どれくらいの方々が送られたことか。きれいに整備された小公園に立ちながら、あれは歴史遺産として残しておくべきだったのではないかと思いました。

宮古南静園——阿部春代

八月一日、富さん危篤の知らせを受け、タイ国から駆けつけ見守ることができました。初日は意識がはっきりし、吸い飲みを持ちこくこく飲む姿を見、富さんが私の顔を引き寄せて頭や顔を撫でるしぐさがありました。二日は呼びかけても反応がなかったが、三日目の朝はパツチリのお顔で、世話をしている方に身振りで「あなたが一番」と何度も繰り返し、感謝とお別れされる場に立ち合うことができました。一九日、勤務のためタイに帰国しましたが、一〇二歳直前の二〇日、「きれいなお顔で召された」との知らせをいただきました。

社員の国内療養所訪問記録 2018年1月～10月(丸括弧は回数)

| | |
|--|-----|
| 松丘保養園 | 9回 |
| 木村幸子 ⑦、岡本緒里、阿部春代 | |
| 東北新生園 | 1回 |
| 岡本緒里 | |
| 多磨全生園 | 44回 |
| 三吉信彦 ⑪、川崎正明 ⑩、藤原真実 ⑨、乗圭子 ⑥、棟居 勇 ④、藤井征子 ②、加藤裕司、阿部春代 | |
| 駿河療養所 | 16回 |
| 乗圭子 ⑦、三吉信彦 ⑤、藤井征子、山本公子、本行輝雄、棟居 勇 | |
| 栗生楽泉園 | 1回 |
| 藤原真実 | |
| 長島愛生園 | 3回 |
| 乗圭子 ②、山本公子 | |
| 邑久光明園 | 9回 |
| 樋口義也 ②、乗圭子 ②、藤田裕香子 ②、山本公子、岡本緒里、長尾文雄 | |
| 大島青松園 | 5回 |
| 三吉信彦 ②、乗圭子、渡辺圭一郎、川崎正明 | |
| 星塚敬愛園 | 4回 |
| 岡本緒里、藤井征子、乗圭子、川崎正明 | |
| 奄美和光園 | 1回 |
| 橋 俊子 | |
| 宮古南静園 | 4回 |
| 阿部春代 ④ | |

* 社員の牧師による療養所教会礼拝説教担当回数も含む。

* 橋俊子社員は、眼科医として毎月1回、松丘保養園で診療している。

好善社短信

◆故藤原偉作元理事長

没後二〇年記念会

一月一七日(土) 一四時～一七時、日本基督教団新栄教会にて開催しました。藤原偉作元理事長は、全国学生社会人ワークキャンプを国内療養所で開催し、多くの若者に多大の影響を与えました。現在の好善社社員の多くは、まさにそのキャンパーたちです。

なお、没後二〇年記念に際して、社員たちの思いを綴った小冊子『藤原理事長と私』発行しました。

◆好善社ホームページを更新

この度、好善社のホームページをリニューアルしました。「公益社団法人好善社」と検索すればご覧いただけます。

URL:<http://https://kozensha.org/>

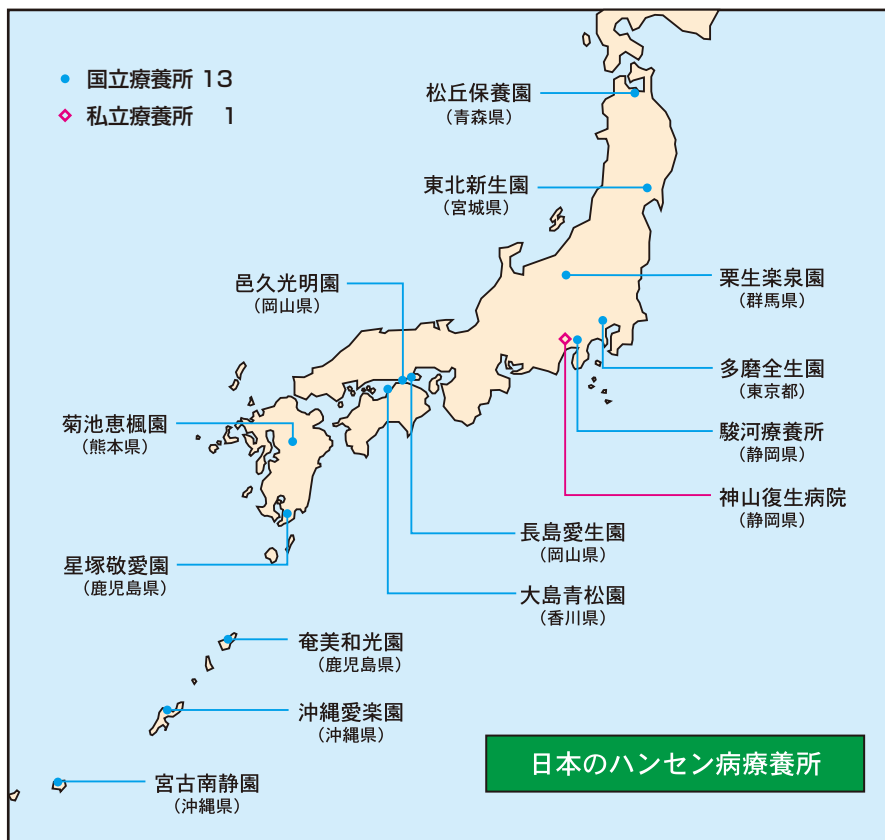
◆本の紹介『ハンセン病家族の絆』

福西征子著 (出版・昭和堂)

先に『ハンセン病療養所に生きた女たち』、また『語り継がれた偏見と差別』を著された元松丘保養園園長の福西さんの近著。現全療協事務局長の藤崎陸安さんの「語り」に加え、やはり回復者のお二人のお兄さんによる「語り」という構成になっています。「語り」であるので読みやすく、また三人兄弟というのは珍しく、兄弟でありつつ、それぞれの違った境遇が浮き彫りにされて、心を打つ著作です。ぜひ読まれることをお勧めします。(理事・三吉信彦)

| 国立療養所 入所者数 | | | |
|-------------|-----|-----|------|
| 2018年5月1日現在 | | | |
| | 男 | 女 | 計 |
| 松丘保養園 | 31 | 45 | 76 |
| 東北新生園 | 27 | 38 | 65 |
| 栗生楽泉園 | 34 | 37 | 71 |
| 多磨全生園 | 74 | 92 | 166 |
| 駿河療養所 | 29 | 25 | 54 |
| 長島愛生園 | 90 | 74 | 164 |
| 邑久光明園 | 41 | 57 | 98 |
| 大島青松園 | 29 | 27 | 56 |
| 菊池恵楓園 | 98 | 123 | 221 |
| 星塚敬愛園 | 57 | 73 | 130 |
| 奄美和光園 | 7 | 17 | 24 |
| 沖縄愛楽園 | 73 | 74 | 147 |
| 宮古南静園 | 32 | 29 | 61 |
| 18年5月計 | 622 | 711 | 1333 |
| 17年5月計 | 685 | 783 | 1468 |
| 前回比 | -63 | -72 | -135 |

2018/5<全療協・提供



12月・クリスマス募金のお願い
国内とタイ国のハンセン病に関わる好善社を支えてください！

2018年度募金（会費・寄付）目標額 1,000万円



後遺症のケアをする阿部看護師
スリン県プラサートの村にて
(2018/9/1)

タイ国ハンセン病支援事業

阿部看護師の活動と
タイのハンセン病活動支援のために
今年度850万円が必要です。

チャンタミット社は、ハンセン病コロニーの
高齢となり、不自由のました元患者を支援する
活動をおこなっています。

国内ハンセン病支援事業

- ・療養所訪問・交流活動
入所者の思いの傍らに身を置くために。
- ・講演会・出版・啓発活動
回復者・入所者のいのちの尊厳と名誉回復のために。
ハンセン病問題の早期解決と「療養所の将来構想」の実現を願って。

タイ国のハンセン病に関わって

1982年以來、好善社はタイに関わり、阿部春代理事（看護師）を28年間派遣するとともに、1987年タイに設立された姉妹団体チャンタミット社（ハンセン病関係NGO）への財政支援・人的交流を続けています。

ハンセン病問題の今

日本国内ハンセン病療養所は、2018年5月1日現在入所者数1,333名となり、平均年齢は85.5歳。急速な高齢化です。

ハンセン病問題は、「らい予防法」廃止22年を迎え、その間、「国家賠償請求訴訟」勝訴、「ハンセン病問題基本法」の施行など解決に向かってはいるかのようにですが、いまだ「療養所の将来構想」「特別法廷」「ハンセン病家族訴訟」など、十分な解決をみていません。

2018年度収支予算（抜粋・単位円）

| | |
|--------------------|-----------|
| 療養所訪問・広報宣伝費 | 4,780,000 |
| タイ国支援事業・チャンタミット社支援 | 1,950,000 |
| ・看護師派遣 | 3,850,000 |
| ・現地調査・交流費 | 2,700,000 |
| 事業運営費 | 8,190,000 |
| 収入 会費 | 4,000,000 |
| 寄付 | 7,800,000 |
| 雑収入 ほか | 40,000 |

2018年11月25日

公益社団法人 好善社 代表理事 三吉信彦
理事 棟居 勇 朝倉秀之 川崎正明
加藤裕司 阿部春代 乗 圭子
本行輝雄